

2.3 「Do for Smile @東日本」プロジェクト 気仙沼復興支援プログラム

気仙沼復興支援プログラムを振り返る

宮城県気仙沼市での復興支援活動は東北学院大学を中心に10を超える大学（当時）との協働プログラムである「大学間連携ボランティアネットワーク」による活動からスタートした。このネットワークは現在では90を超える大学が参加するまでに拡大している。活動の様子は参加学生の報告に委ねるが、今年度も唐桑・南三陸町、および仙台七夕まつりボランティアも含めて13名の学生が参加した。

気仙沼湾に浮かぶ大島での支援活動は明学独自のプログラムとして、この活動から派生したものである。本学生4名とともに人口約2,800人の気仙沼大島浦の浜港にはじめに足を踏み入れたのは2012年3月27日（火）であった。漁業と観光の島である大島は東西からの津波と火災により宿泊施設の多くが被災し、特にボイラーが水を被った施設では、震災後1年を経過してもなお復旧できない状況にあった。大島の高台に建つ旅館明海荘は畑の一部が水を被ったものの、島内では比較的早期に営業を再開していた。ただし、気仙沼のウリである魚介類の入荷が安定せず、宿泊者は観光よりも復興関係者とボランティア主体であった。最初の活動は明海荘所有の畑の整地作業という体力勝負の活動で、活動終了後にいただいた夕食の美味しさは格別なものであった。

あれから4年、大島での活動は復興支援から地域活動支援へと変化した。津波でお孫さんを失ったご夫婦との交流がきっかけで、大島に足を運んだ時にはまずお孫さんの仏壇に手を合わせる事が、今も先輩から後輩へと受け継がれている。地域の要請による活動は早春のつばきマラソン大会、現在も校庭に仮設住宅が残る島唯一の大島中学校の文化祭、9月の大島神社の例大祭、秋の地区別対抗体育祭、通年のゆず収穫や観光農園整備のお手伝いなど。島の文化祭や体育祭は生徒ばかりでなく島の一大イベントであり、多くの島民が生徒の作品を鑑賞し、競技に参加している。島の伝統として生徒の親は裏方として昼食準備の役割が与えられていたが、参加学生がこの役割を果たすことで、親も子どもの活動を見ることができることになり、大変喜ばれた。一方ではこのような地域活動がはたして地域のための復興支援活動と言えるのかとの考えもあり、学生の議論は絶えることがなかった。長期的な視点を持って復興支援活動の今後を検討し、活動を集約した上で地域の要望に応える形で継続するのが望ましいとの考えから、気仙沼大島での活動は今年度末を持って終了とした。ネットワークでの活動は継続する。

2016年2月、最後の活動に12名の学生が参加した。浦の浜港の復興状況は道半ばという感じであるが、震災以前から計画されていた2018年度開通予定の本土とをつなぐ橋脚の工事が形を成してきた。この橋が開通すると、多くの車輛が島を訪れる見通しであるとのことであった。連絡船はバスに形を変える。一方で観光農園支援が絶え、整備した土地が原野に戻りつつある姿に支援活動の難しさを見た。現在学生は4年間の活動を報告書としてまとめる作業に入っている。今後学生は有志の活動として「第二

のふるさと」気仙沼大島に足を運ぶことになるが、今回同行した職員としては、橋が開通し島の生活がいかに変化するのか、様子を見届けても良かったのかなとも感じている。 (職員 波多野洋行)

学生からの報告

明学・気仙沼大島復興支援プログラム

2011年度から発足した気仙沼大島セクションの活動は、話し合いの末、2015年度限りで終了することとなった。そして、年度末には「活動のまとめ」として締めくくりとなる現地活動をおこなうことが決定し、それに沿う形で春、夏、秋、冬の活動を展開した。

今年度は大きな活動として大島神社のお祭りに参加させていただいた。毎年9月におこなわれている秋季例大祭神輿渡行祭は伝統的なお祭りで、お神輿を担いで島をぐるりと回る。しかし、島の過疎化や高齢化によりお神輿を担ぐ人員が不足し、ここ最近はお神輿担ぎをおこなっていなかった。明学生が参加してのお神輿隊としての活動は昨年度から始まっており、2年連続で参加した学生もいたが、楽しみである反面、「お祭り」という神聖な場に自分たちが入るとのことへの緊張と、役目を果たせるであろうかという不安が大きかった。現地の方々は皆、本当に温かく歓迎してくださり、お神輿の担ぎ方からお祭りの伝統、文化、人生論等、たくさんのお話を聞くことができた。先輩方と現地の方との信頼関係を感じる瞬間でもあった。また、私たちは日本に住んでいながら日本の文化について知らないことがとても多いと気づいた。



お神輿はとても重く、移動距離も長かったが、普段の活動では行かない場所に行き、多くの人と出会い、大島の新たな魅力を発見できたことは貴重な経験であった。そ



して、休憩所へ着くたび多くの飲み物と食べ物を振る舞っていただき、最後の方はおなかがいっぱいになっていた。

秋学期は、重要な活動である「インタビュー」をおこなっている。年度末にこれまでお世話になった方々へ感謝の意と自分たちの活動を萌芽期から振り返ることを目的とした報告書を作る。その中には特に交流の深かった現地の方々に思い出やボランティア、復興等に関してのお話をお聞きする章を設けるため、学生が現地へ赴き、会話を通して「何を伝えたいのか」をまとめる作業を進めている。震災後、時とともに現れるさまざまな葛藤や、ボランティアに対しての受け入れ側の考え、大学生・明学生について、そして復興とは何か

など、とても濃いインタビューとなっており、読む人の心を打ち、多くのことを考えさせられる内容である。

(学生メンバー 社会学部社会福祉学科)

大学間連携災害ボランティアネットワーク 気仙沼市プロジェクト

8月24日(月)から8月27日(木)、東北学院大学が実施する「大学間連携災害ボランティアネットワーク 気仙沼市プロジェクト」に参加した。今年度は約70名の学生が参加した。

活動は気仙沼市内での清掃活動、市内唐桑町での漁業支援活動を中心におこなった。実際の活動以外の時間にも、現地の方から震災当時のお話や復興状況を伺う機会があり、参加者が「震災とは何か」「ボランティアとは何か」を深く考えることができた。

私は昨年度に続き2度目の参加だった。現地の様子は少しずつ変わってきているものの、未だ多くの力を必要としていると感じた。現地の方々の復興に対する前向きな姿勢は、昨年と変わらずみることができた。

全国さまざまな大学から学生が参加し、共同生活をしながら活動をおこなう、そこで感じた意見を共有し合う、というところがこのプロジェクトの最大の特徴である。ただ、70人での共同生活はとても難しく、まとまりに欠ける部分もあった。もっと学生主体で積極的になるという意識を皆が持つことが大切だと感じた。昨年度も今年度も、実際に現地に行ってみないと分からないことがたくさんあった。このプロジェクトはぜひ続けてほしいと思う。

(法学部消費情報環境法学科)

大学間連携災害ボランティアネットワーク 仙台七夕まつり 2015

仙台では1618年から七夕の行事を取り入れ、現在では「田の神を迎える行事」として日本一と称される「仙台七夕まつり」が開催されている。そこに私たちはボランティア学生として、現地の東北学院大学の学生とともに受付、誘導係、縁日の手伝いなど担当を持ち取り組んだ。

この活動を通して、1. お祭りに来る人は家族連れが多く、子どもだけではなく大人も浴衣姿であること 2. 仕事帰りに同僚同士でいること 3. 外国人が多いことに気がつ



いた。以上3点から、このお祭りが歴史が深く、地元の方に愛されていると分かる。また、現地の方々の関わり方を見ていると、皆が親戚であるかのように会話をしていた。実際に東北学院大学のメンバーも私たちが温かく迎え入れてくれ、関東に戻ってきた今でも連絡を取り合っている。

年に一度の歴史あるお祭りに行ってみたい、温かく接してくれる現地の方に会いたい、ボランティアという共通点を持つ友達を作りたいと思う方は、是非参加してみてください。

(経済学部経営学科)